

# 「英検」研究助成 報告

研究助成金制度は、英語能力テストおよび英語教育に関する優秀な研究企画に対して助成金を交付し、10か月間の研究後、その結果を公表するものです。実用英語の一層の普及・発展と英語能力検定試験の質的向上を目的に1987年に発足し、英語教育に携わる先生方の研究を支え続けています。このコーナーでは、過去に提出された研究の中から一つを取り上げ、その内容の一部をご紹介します。

第20回  
調査部門

## 中学校入学以前の英語学習経験が 中学校における英語力に及ぼす影響

—英語学習歴調査と中学校3年間の英語力追跡調査の分析—

筑波大学附属中学校 教諭 肥沼 則明



### 1 研究の概要

本研究は、新学習指導要領の施行によって小学校5、6年生に「外国語活動」が導入されるのを前に、中学校入学以前の英語学習経験が中学校における英語力に及ぼす影響を明らかにしようとしたものである。

研究の第一歩は、生徒の中学校入学以前の英語学習歴を調査することであった。これには勤務校の平成17年度入学生保護者の協力を得て、生徒が生まれてから中学校に入学するまでにどのような英語学習歴があったかをアンケートで回答してもらい(N=185/205、回収率90.2%)、その結果を元に生徒を表1のような7つのグループに分けた。

表1 調査対象生徒のグループ化

班	分類条件	人数
A	未経験者	9
B	小学校の英会話授業のみ	68
C	英会話学校経験者(週1回・3年以上)	20
D	英会話学校経験者(同上条件未満)	6
E	その他の学習経験者(週1回・3年以上)	30
F	その他の学習経験者(同上条件未満)	43
G	英語圏帰国子女	9

[注] CとDには小学校英会話経験者も含み、EとFには小学校英会話及び英会話学校経験者も含む。

なお、グループ分けにおいてC～Fのような区分を設定したのは、先行研究である太田・神白(2004)と勤務校英語科(2004)の研究結果から、中学校における英語力に影響を及ぼす、それ以前の英語学習の頻度と期間の臨界点が「週1回・3年以上」であることが示唆されていたからである。

次に、平素の教育活動の中で蓄積されていた評価データのうち、①音素聞き分けテスト、②面接テスト、③定期テスト、の3つについて、上記のグループ間に有意な差がないかを検証した。以下にその調査結果の要点を示すが、紙幅の関係で全てを記すことは不可能なので、詳細は報告書原著を参照いただきたい。

### 2 調査結果

#### (1) 音素聞き分けテスト

本テストは、音素が一部異なる単語を3つ連続で聞き、その違いを答えるというもので、「TDKヒアリングトレーニングCD:入門編」のAural Perception Test(50問)を利用した。

入学直後の5月に行ったテストでは、グループGの得点がグループBの得点より有意に高かった。また、卒業間際の2月に行ったテストでは、グループ間に有意な差は見られなかった。さらに、入学直後のテストの成績上位者と下

位者を調べると、グループEには上位者が多く、グループBには下位者が多かった。

#### (2) 面接テスト

本テストは、生徒が教師と一対一で対話する口頭面接テストである。勤務校では3年間で計10回程度これを行っているが、評価観点が単一で比較データとして利用できるものは第1回(1年生7月)のものだけであったので、その結果について分析を行った。

しかし、このテストにおいては、いわゆる「練習効果」が得点に表れている可能性が高かったため、統計処理は行わず、記述統計量(表2参照)から傾向を読み取ることにした。

表2 第1回面接テスト得点の記述統計量

班	度数	平均値	標準偏差	最小値	最大値
A	9	17.7	1.8	15	21
B	61	17.7	2.0	12	21
C	17	18.4	1.7	15	21
D	6	17.2	1.5	15	19
E	29	18.3	1.9	14	21
F	40	17.6	2.3	10	21
G	9	19.9	1.5	17	21
計	171	17.9	2.0	10	21

#### (3) 定期テスト

勤務校では10年以上前から評価観点別に問題を構成した定期テストを行っているが、その中で放送による「表現理解」という項目が、(2)で問題になった「練習効果」を最小限に抑えたものであると考えられたので、その項目の得点について分析することにした。

しかし、本テストについては、問題の妥当性が保証されていない、全12回のテスト毎の内容が同一ではないとの理由から、経年変化を統計的に比較する意味はないと判断されたので、第1回(1年前期中間)、第5回(2年前期中間)、第9回(3年前期中間)、第11回(3年後期中間)の記述統計量(省略。報告書原著の図1～4)から傾向を読み取ることにした。それによると、第1回の成績順は①G、②D、③E、④C、⑤AとF、⑦Bであった。また、第11回では①G、②B・C・D・E、⑥A、⑦Fであった。

### 3 考察

#### (1) 音素聞き分けテストについて

入門期における英語の音素を聞き分ける力は、英語

圏での長期生活経験者を除くと、どのような事前の英語学習経験も影響されないことがわかった。また、音声を中心とした指導を3年間徹底して行った後は、どのグループ間にも音素を聞き分ける力に差はなくなることが判明した。

#### (2) 面接テストについて

入門期では、既習事項をどの程度使いこなせるかというテストにおいて、中学校入学以前の英語学習経験が影響していることが示唆された。なお、その原因の1つとして、一対一の面接試験では話すことに慣れているかどうかという精神的余裕の程度が成績に影響した可能性があることを英語科では議論している。また、テスト内容は異なるが、第3回テスト(1年3月)までの成績上位グループは同じであり、少なくとも入学後1年間は面接テストの得点に中学校入学以前の英語学習経験が影響していることが示唆された。

#### (3) 定期テストについて

グループGの得点は、3年間を通して他のどのグループより目立って高く、英語圏で実際に英語を使って生活した経験を持つ生徒の「聞くこと」の理解力は、中学校3年間の英語学習を経ても、他の生徒たちに追いつかれることがないことがわかった。

一方、グループG以外の生徒については、「理解」の面においても、初期の段階では中学校入学以前の英語学習経験の度合いが影響することがわかった。しかし、学習が進むにつれてその差は小さくなり、2年半後にはほとんど差がなくなることでもわかった。

### 4 成果と課題

本研究では、言語教育を中学校入学以前に行い、それが中学校における英語力に対して統計的にも有意な差が現れるほど効果を上げるには、「週1回・3年以上」という一種の臨界点があることを追認できた。

一方、生徒が中学校入学以前に受けた英語学習経験の影響を計るには、「期間」と「場所」だけでなく、「内容」や「指導法」も議論の対象に加えなくてはならないことや、中学校在学中の英語力の推移と中学校入学以前に受けた英語学習経験との関連については、中学校における指導内容まで踏み込んで議論をしないと調査結果の真の意味を読み誤る可能性があるなど、今後の研究への課題も残った。